

## 青年期男子の自我理想とその形成過程

著者	岡田 努
雑誌名	教育心理学研究
巻	35
号	2
ページ	116-121
発行年	1987-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/12341">http://hdl.handle.net/2297/12341</a>

## 青年期男子の自我理想とその形成過程

岡 田 努\*

### THE EGO IDEAL IN MALE ADOLESCENCE AND ITS PROCESS OF FORMATION

Tsutomu OKADA

This study was attempted to clarify the process of the formation of ego-ideal in adolescence. A questionnaire inquiring into real- and ideal-self images, peer image, self esteem, and self-acceptance was conducted on 158 male subjects of three age groups: junior and senior high school, and college students. Results were as follows: 1) there were no significant age differences in the correlation between 'real self'-'ideal self' discrepancy and self-acceptance, and in the correlation between self esteem and self-acceptance; 2) correlation between 'real self'-'ideal self' discrepancy and self esteem was higher in college students than in other two younger groups; 3) whereas significantly high correlation was found between ideal self and peer image in junior high school students, and between real self and ideal self in the older groups. It was thus concluded that, in early adolescence, the peer image one holds is introjected into one's ideal self image so that one's ego-ideal is consolidated then enabling one to have self esteem based on 'real self'-'ideal self' discrepancy in late adolescence.

Key words: ego-ideal, self image, peer image, self esteem, adolescence.

### 問 題

青年期の自己形成の問題に関する研究は、Erikson, E. H. (1959) の自我同一性の概念を中心に数多くなされてきている。しかし自我同一性の概念は主に青年期後期(大学生期以降)における青年のありかたと深く結びついた概念であり、それ以前の段階からの発達過程を説明するものとしては必ずしも十分なものとはいえない。よって本研究では青年期前期(中学生期)から後期に至る自己形成の過程を詳細に記述した Blos, P. の理論を中心に、これについての実証的検討を行うことを目的とする。

Blos の青年期理論は、精神分析的方向づけをもった臨床家の間では一定の評価を得るものではあったが、その反面実証的研究は皆無に等しい。よって本研究では、この理論のうち特に自我理想(ego-ideal)の形成という

点に焦点をあて、それに及ぼす友人関係の影響について検討したい。

#### 1. Blos の青年期理論

ここで本研究の出発点となる Blos の青年期論について概観したい。

青年期における両親からの心理的離乳は同性同年代の友人との親密な関わりを促進する。この友人関係は Blos によれば以下のような意味をもつという。すなわちこのような友人関係を通じて個人はその友人像を自分の理想あるいは規範として取り入れていく。この規範を自我理想(ego-ideal)とよび、超自我という概念と対照的に考えられている。すなわち、超自我が社会や両親の要請する望ましさを取り入れたイメージであり、それに従わないことが個人にとって懲罰的な意味をもつもの(こう在らねばならない姿)であるのに対して、自我理想はより個人に親和的な個人にとっての理想を表現した在り方を示すもの(こう在りたい姿)であるといえる。そしてこの自我理想が次第に超自我に代り個人にとっての規範となっ

\* 東京都立大学(Tokyo Metropolitan University)

ていくのである。自我理想が確固なものとなるに従って、友人関係においても、自己の延長として対象をみる性質は次第に薄れてゆき、より現実的な関係をもつようになってくる。

Blos は青年期中期から後期（高校生期から大学生期）にかけて、このような自我理想が形成されるとしており、これを青年期における最も重要な発達課題の1つに挙げている。そして自我理想が確実になることによって、個人の内面における諸々の衝動が適切に操作しうようになり、情緒的安定がもたらされる。自我同一性の確立（Erikson, 1959）へ向けての模索（青年期危機）は、この情緒的安定を基盤としてはじめて可能となるのである。（以上 Blos, 1962, 1967, 1979）

## 2. 本研究における視点

以上のような Blos の青年期理論をもとに本研究では以下のような仮説をもって検討をおこなうものとする。

(1) 自我理想及び超自我は、共に自我に対する規範となる個人の指標であることから、質問紙上の理想自己像には自我理想ないしは超自我が反映され、現実自己像には自我の在り方が反映されると考えられる。このとき自我理想と超自我の性質の違い（自我親和的か懲罰的か）によって次のような違いがみられよう。すなわち、自我理想の形成が不十分で、よって超自我がより強く理想自己像に反映されている場合、現実自己像と理想自己像の差異はその個人にとって懲罰的な意味をもつため、この差異の大きな個人は自分自身を満足に受容することが困難となるだろう。一方自我理想の形成が十分になされている個人においては、現実自己像と理想自己像の隔たりが大きい場合においても、その自分を十分に受け容れることができると考えられる。よって自我理想の形成が発達的にみられるならば、現実—理想自己像間の隔たりと自分に対する受容の関係は、青年期前期の者ほど逆相関を示し、後期に近づくほど無相関に近くなるだろう。

同様に現実—理想自己像間の隔たりは自己評価を規定するため、自己評価と自分自身を満足に受容する度合の間においては青年期前期の者ほど相関が高く、後期に近づくほど無相関に近くなるだろう。

(2) 自我理想が青年期前・中期における友人像を個人の規範として取り入れた結果であるとするならば、青年期前・中期において理想自己像と友人像の相関が高くなるだろう。

## 方 法

### 1. 尺度

(1) 現実自己像・理想自己像・友人像の測定 長島・

原野・斎藤・堀（1967）の作成した Self Differential 尺度中学生用（7件法, 35項目）を用い、現実自己像、理想自己像、友人像について評定させた。本尺度は SD 法様式の形容詞対から成っており、本研究ではより否定的内容の語から肯定的内容の語にかけて1から7点とした。

(2) 自己評価 Rosenberg（1965）の Self Esteem 尺度の邦訳版（山本・松井・山成, 1982）を用いる。尺度は5件法10項目で各項目それぞれ自己評価の低いものから順に1—5点とする。

(3) 自己に対する満足した受容 CPI（California Psychological Inventory）より2つの下位尺度（Sa: Self Acceptance, Wb: Sense of well-being）を選び、このうち年少者に施行困難な項目を除いた28項目（Sa 13項目, Wb 15項目）を用いる。各下位尺度の内容については以下の通りである。Sa（自己満足感）は“自己の価値を認め、自己に満足して自立的に思考し、行動する能力の程度”（我妻・川口・白井, 1967）とされており又 Wb（幸福感）は“心身ともに健康で悩みや不満を感じることがどの程度なのかを測定する”（我妻他, 1967）となっている。よって本研究における“自己に対する満足した受容”にほぼ合致した尺度であると考えられる。本尺度は、“はい”“いいえ”の解答による2件法で、より受容・満足の度合の高いものを1点、他のものを0点とした。

具体的な数示については以下の通りである（尚、各尺度の項目についてはTABLE 1～4を参照されたい）。

#### (1) 現実自己像

見たままの自分または現在の自分について あてはまるところに○印をして下さい。

#### (2) 理想自己像

理想の自分（こうありたいと思う自分）について あてはまるところに○印をして下さい。

#### (3) 友人像

あなたにとってもっとも心の通じると思う同性の友達を思いうかべて下さい。あなたはその人についてどのように思っていますか。あてはまるところに○印をして下さい。

#### (4) CPI

次の文章を読んで、あなたが賛成だったり、あなた自身にあてはまるものがあれば、『はい』のところ○をつけて下さい。また、文章の内容に不賛成だったり、あなた自身にあてはまらないときは、『いいえ』のところ○をつけてください。

#### (5) 自己評価

以下のそれぞれの項目について、あなた自身にあては

まるところに○印をつけて下さい。

## 2. 被験者

東京近郊の公立中学校2年生 男子56名

同公立高等学校2年生 男子50名

同私立大学学部学生 男子52名

いずれも授業時間の一部を用いて一斉に施行した。実施時期は昭和59年7月から10月にかけてである。

## 3. 仮説

中学から高校生期においては未だ自我理想の形成が不十分であり (Blos, 1962; 皆川, 1980; 辻・頼藤, 1979) 理想自己像は超自我が強く反映したものであると考えられる。よって Self Differential における現実・理想自己像間の隔たりの度合は、自分に対する満足した受容の度合 (CPI 得点) とは逆相関を示し、自己評価得点とは正の相関をもつだろう。またこの時期には理想自己像に友人像が自我理想のモデルとしてとりいれられると考えられることから、理想自己像と友人像の間に高い相関関係がみられるだろう。大学生期においては、自我理想の形成がすすみ (Blos, 1962; 皆川, 1980; 辻・頼藤, 1979), 理想自己像には超自我よりも自我理想がより強く反映されると考えられる。よって、Self Differential における現実・理想自己像間の隔たりの度合と CPI・自己評価得点間の相関は中・高校生期に比べ低くなるだろう。また、すでに友人像を自我理想のモデルとしてとり入れる段階が終っていることから、理想自己像と友人像との相関関係に代って、現実自己像と理想自己像との間に高い相関がみられるようになるだろう。

## 結 果

### 1. 項目分析

Self Differential 尺度については、各年代別個に主因子法による因子分析を行い Varimax 回転を行ったところ各年代にはほぼ共通する因子構造を得たため、改めて全年代をまとめた因子分析を行い3因子を得た。Varimax 回転後固有値 0.5 以上の因子・項目について解釈を行い、第Ⅰ因子を“向性”、第Ⅱ因子を“誠実性”、第Ⅲ因子を“強靱性”と命名した (TABLE 1)。次に CPI については項目得点と尺度得点間の相関を点二系列相関係数を以て求めた。その結果ほとんどの項目について有意な相関が認められた (TABLE 2, 3)。自己評価尺度については主成分分析を行い、すべての項目について第Ⅰ主成分における高い負荷量を得、尺度の一次元性が確認された (TABLE 4)。尚、本尺度の各年代についての信頼性係数を折半法により求めたところ、Guttman 係数で中学 .68, 高校 .80, 大学 .89 であった。

TABLE 1 Factor loadings on self-differential scale

Item		Factor		
		I	II	III
1. 頼りない	— 頼もしい	.311	.402	.598
2. 責任感のある	— 責任感のない	-.154	-.447	-.327
3. 無口な	— おしゃべりな	.558	-.353	-.057
4. 話しやすい	— 話しにくい	-.468	-.417	-.155
5. 嫌いな	— 好きな	.489	.286	.286
6. 弱々しい	— たくましい	.380	.203	.713
7. 不熱心な	— 熱心な	.332	.532	.434
8. おもしろい	— つまらない	-.708	-.144	-.241
9. やさしい	— こわい	-.539	-.447	-.079
10. 弱い	— 強い	.332	.310	.728
11. 陰気な	— 陽気な	.728	.147	.337
12. 暖かい	— 冷たい	-.576	-.405	-.158
13. たのしい	— さびしい	-.717	-.151	-.280
14. 清潔な	— 不潔な	-.300	-.593	-.300
15. 無神経な	— 神経質な	-.094	.420	-.210
16. けちな	— 気前のよい	.350	.315	.228
17. 速い	— 遅い	-.305	-.319	-.504
18. ていねいな	— 乱暴な	-.203	-.677	-.218
19. だらしない	— きちんとした	.211	.686	.324
20. 意地っぱりな	— 素直な	.281	.590	.152
21. うるさい	— 静かな	-.227	.568	.083
22. 不幸な	— 幸福な	.397	.336	.462
23. 不用心な	— 用心深い	.090	.552	.093
24. まじめな	— ふまじめな	-.028	-.688	-.160
25. 積極的な	— 消極的な	-.426	-.323	-.552
26. 心強い	— 心ばそい	-.410	-.343	-.654
27. おちつきのない	— おちつきのある	.013	.597	.044
28. 楽観的な	— 悲観的な	-.460	-.031	-.300
29. ふゆかいな	— ゆかいな	.731	.157	.314
30. 派手な	— 地味な	-.273	.056	-.192
31. 内向的な	— 外向的な	.481	.004	.308
32. 不親切な	— 親切な	.512	.542	.207
33. 気長な	— 短気な	-.133	-.454	-.112
34. 気が強い	— 気が弱い	-.312	-.099	-.615
35. 明るい	— 暗い	.725	.095	.259

TABLE 2 Point biserial correlation on CPI

Item	Sub scale	Correlation coefficient
1. † ほかの人といっしょにるとき、私は自分からなにかを提案するよりも、ほかの人が望むことをする	Sa	.171*
2. † 週に何回も、私は何か恐ろしいことが起きるのではないかという不安におそわれる	Wb	.427**
3. 私の毎日の生活は充実している	Sa	.496**
4. † 知らない人に話しかけるのが、私にはなかなかむずかしい	Sa	.397**
5. 私はときどき、自分が知らないことでも知っているようなふりをする	Sa	.113
6. † 私はある人に会おうのを避けるために、わざわざ道を変えることがある	Wb	.324**

7. 私が人と言ひ争いをするのは、たい てい物事の筋を通すためである	Sa	.281**
8. † 少なくとも週に1度は、私ははっきり した理由もないのに、からだ全体がか っとほてってることがある	Wb	.317**
9. 正直のところ、私は勉強をできるだ け少ししかしないですませることがよ くある	Sa	.165*
10. † 人びとの中にいると、私はどうい うことを話したら、人に笑われたりばか にされたりせずにすむかわからなくな る	Sa	.481**
11. 私は目まいがするようなことはめっ たにない	Sa	.225**
12. 私は何かをする前に、友達がそれに 対してどういう態度を示すだろうかと 考えてみる	Sa	-.058
13. ふだん私は自分のすることが、うま くいくと思っている	Wb	.313**

† この項目は得点を逆転して採点を行った。

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

TABLE 3 Point biserial correlation on CPI

Item	Sub scale	Correlation coefficient
14. † 私は初めて会った人とは、何を話し てよいのか話題を見つけるのに苦労す る	Sa	.424**
15. † 人は自分のことさえ、しっかりやっ ていけばよい。他人のことなどに、か かわりあう必要はない	Sa	.314**
16. † 私には自分でもふれたくないほど、 気にかかる問題がある	Wb	.488**
17. ふだん私は、生きているのは良いこ とだと思っている	Wb	.316**
18. 私はときどき規則をやぶったり、し てはならないことをやるのが好きだ	Sa	.088
19. 私は舞台か映画の俳優になれたら いいと思う	Sa	.058
20. † 私は自分なんかどうなったっていい と思っている	Wb	.434**
21. † 私は暗やみに1人でいるのがこわい	Wb	.313**
22. † 私は、2・3日おきに、夜、悪夢で うなされる	Wb	.178*
23. † 私は自分に何の危険もないことがわ かっているながら、人や物をこわがった ことがある	Wb	.451**
24. † 私がせっかく楽しく張り切っている ときでも、だれかふさぎこんでいる人 が現れると、気分をすっかりぶちこわ されてしまう	Wb	.204**
25. † うちの人は、私をいつまでも子供扱 いにして、大人としてみてくれない	Wb	.376**
26. † だれも私のことをわかってくれない	Wb	.460**
27. だれもが私に同情してくれる	Wb	.165*
28. † ほとんど毎日のように何事かが起き て、私をひどく驚かせる	Wb	.471**

† この項目は得点を逆転して採点を行った。

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

TABLE 4 Principal component analysis on self  
esteem scale

Item	First principal component
1. 自分に自信がある	.768
2. 少なくとも人並には価値のある人間である	.707
3. いろいろな良い素質をもっている	.711
4. 敗北者だと思ふことがよくある	.467
5. 物事を人並みにはうまくやれる	.618
6. 自分には自慢できるところがあまりない	.562
7. 自分に対して肯定的である	.534
8. だいたいにおいて自分に満足している	.635
9. 自分が全くだめな人間だと思ふことがよくある	.656
10. 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思 う	.722

注：項目 4, 6, 9, 10 については得点を逆転して解析を行った。

## 2. 解析

Self Differential 尺度における各評定値間での隔た  
り (Discrepancy) を D スコア [ $D = \sqrt{\sum d^2} (1)$ ] によつて  
求めた。CPI については各下位尺度及び尺度全体につ  
いての合計点を求め、それぞれ CPI, Sa, Wb 得点と  
した。自己評価尺度については全項目の合計を以て自己  
評価得点とした。これら得点の平均値及び標準偏差を  
TABLE 5 に示す。

TABLE 5 Mean and SD on real-ideal self  
discrepancy, CPI and self esteem scale

	Jr. hi school	Sr. hi school	College
=Discrepancy=			
(Factor I)			
Mean	4.76	5.19	4.93
SD	2.74	2.35	1.97
(Factor II)			
Mean	6.11	6.11	5.33
SD	2.82	2.47	1.96
(Factor III)			
Mean	5.56	5.64	5.64
SD	2.65	2.23	2.37
(total)			
Mean	11.51	11.27	11.00
SD	4.54	3.75	3.29
=CPI=			
(Sa)			
Mean	7.59	7.24	8.00
SD	1.84	2.08	2.23
(Wb)			
Mean	10.46	10.36	11.62
SD	2.59	2.37	2.77
(total)			
Mean	18.05	17.60	19.62
SD	3.77	3.32	3.79
=Self esteem scale=			
Mean	34.80	32.06	34.12
SD	5.94	5.64	8.46

TABLE 6 Correlation coefficient among real-ideal self discrepancy, CPI and self esteem scale

	Jr. hi	Sr. hi	College students	$\chi^2$ test
Discrepancy vs CPI				
CPI	-.25*	-.23*	-.27**	
Sa	-.22	-.07	-.22	
Wb	-.22	-.25*	-.24*	
Discrepancy vs self esteem scale				
	-.13	-.33**	-.56**	*
Self esteem scale vs CPI				
CPI	.55**	.45**	.56**	
Sa	.42**	.33**	.34**	
Wb	.50**	.34**	.59**	

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$

(1) 自己像と他の尺度との相関 現実自己像・理想自己像間の隔たりと自己に対する満足した受容及び自己評価との関係の発達の差異を検討するため、現実・理想自己像間のDスコアとCPI、自己評価得点間の相互相関を求めた(TABLE 6)。さらにこの相関係数を $z$ 変換し年代間についての $\chi^2$ 検定を行い年代差を求めた。その結果、現実・理想自己像間のDスコアと自己評価得点の間に有意な差( $\chi^2=6.45$ ,  $p < .05$ )が見出された。下位検定の結果、高校・大学間において有意差( $\chi^2=2.06$ ,  $p < .05$ )のあることが判明した。またDスコア・自己評価・CPIの三者間での相互相関が有意なことから、これらにつきそれぞれを統制した偏相関係数を求めたところ、Dスコア

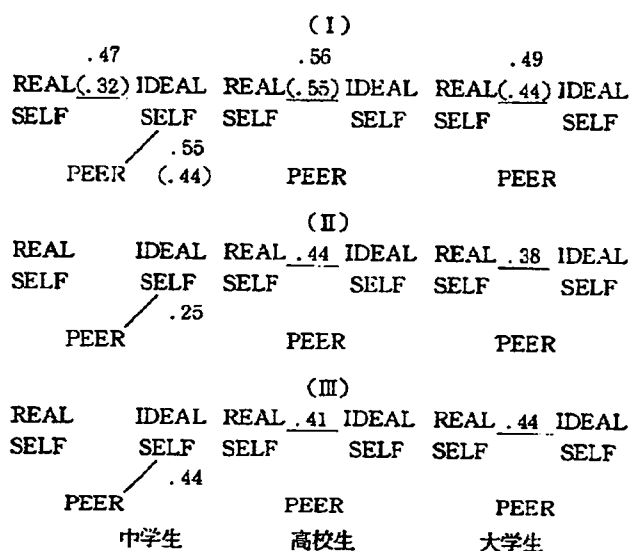


FIG. 1 Correlation among real, ideal self and peer image

Note: value correlation coefficient  
(value) partial correlation coefficient

・CPI得点間の相関はいずれの年代においても有意とならないことが明らかとなった(中学 $r = -.22$ , 高校 $r = -.10$ , 大学 $r = .06$ )。よってこれは自己評価・CPI間での比較的高い相関に影響されたみかけ上の相関であると考えられる。

(2) 友人像と自己像の関係 友人像が理想自己像のモデルとして取入れられていく過程を検討するため、友人像・現実自己像・理想自己像について、Self Differential 尺度各因子ごとの合成得点間の相互相関を求めた。さらに、相関関係が二者以上にわたるものについては、Blalock の因果推論(安田・海野, 1977)を参考に偏相関係数を求め因果性の推論を行った(FIG. 1)。この結果、各因子とも中学生期においては友人像から理想自己像への関係が高いのに対して、高校生期以降においてはこれに代って理想自己・現実自己の関係が高くなるが見出された。

## 考 察

### 1. 自我理想の形成過程

現実・理想自己像間のDスコアとCPI得点の間での相関、自己評価得点とCPI得点の間での相関には年代差は見出されなかった。よって当初の仮説は検証されなかったことになる。一方このDスコアと自己評価得点の間での相関については、加齢とともに相関関係が生じることが見出された。このことから以下のような解釈が考えられよう。

自我理想は、個人の自我への評価や行動の基準のうちで、自我親和的な側面が自我に統合された結果として生じたものとされている(Kernberg, 1976 前田監訳, 1983)。逆に超自我はその懲罰性によって、自我には統合されにくく無意識化されているため、理想自己像には反映されにくいことが考えられる。すなわち自我理想は超自我に比べより意識化されており、理想自己像に反映されやすいものと考えられるのである。このことから、自我理想の発達したより高年齢の群において、現実・理想自己像間の隔たりと自己評価得点が相関をもつに至ったと考えられる。すなわち、自我理想が十分形成されていない低年齢群では、理想自己像は自我理想を反映しえないために、自我への行動や評価或は自己評価のための基準として、理想自己像が機能しないのである。

このことは、自己意識研究においていわれる、自己評価に対する内的基準(現実自己と理想自己の隔たりによって自己評価を行うこと)——あるいは梶田(1980)のいう“自己満足的な”自己評価——が青年期後期以降において生じるものであることをも示唆するといえよう。すなわち、

低年齢群においては自己評価のための基準としては外的なそれが主に機能しており、これが青年期後期以降において内的基準へと移行する可能性が考えられるのである。但し本研究においては、外的基準についての測定は行われていないため、この可能性についてはあくまで推論の域を出ない。

## 2. 友人像と現実・理想自己像との関係

FIG. 1にあるように、中学生期においては、友人像と理想自己像の間に相関関係がみられるが、高校生期以降においてはこの関係がみられなくなり、代って理想自己像と現実自己像の関係が見られるようになる。よって青年期前期においては友人像が理想自己像のモデルとして取り入れられ、これが、青年期中期以降において、現実自己像に対する比較対象として機能するようになるものと考えられる。

またこのことは、前述の自我理想の形成過程と併せて考えた場合、次のようにいうことができよう。

すなわち青年期前期において友人像が理想自己像にとり入れられ、青年期中期以降この理想自己像が現実自己像に対する比較対象となる。やがてこの比較が青年期後期に至り自己評価の基準として機能するようになる。またこの現象を力動的過程としてみると、友人像の意識レベルでの取り入れによって自我理想が形成され、懲罰的性質をもつ超自我に代って、個人の自我に対する行動や評価の基準となるといえよう。自我理想は自我親和的な性質をもつ、より意識化されたイメージであるところから、理想自己像に反映される。その結果、理想自己像を以って自己評価を行うことが可能となるのである。またこの結果は、様々な対象への同一化を統合した結果として自我同一性が確立されたとする Erikson (1959) の考察とも符合するものである。

尚、本研究においては、個々のケースの特徴についての検討等個人レベルでの検討は行われなかったが、これについては、今後の課題となろう。

## 引用文献

- Blos, P. 1962 *On adolescence: a psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.
- Blos, P. 1967 The second individuation process in adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186.
- Blos, P. 1979 The genealogy of ego ideal. In *The adolescent passage*. New York: International Universities Press.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.
- 梶田敬一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- カンパーク, O. 1980 前田重治 (監訳) 1983 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版会 (Kernberg, O. 1976 *Object relation and clinical psychoanalysis*. New York: Jason Aronson.)
- 皆川邦直 1980 青春期・青年期の精神分析的発達論—ピーター・ブロスの研究をめぐって—小此木啓吾 (編) 青年の精神病理 2, 43-166 弘文堂
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究 (2) —Self-Differential 作成の試み— 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-67.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Universities Press.
- 辻 悟・頼藤和寛 1979 青春期心性 現代精神医学大系 7 B 97-132 中山書店
- 我妻洋・川口茂雄・白倉憲二 1967 カリフォルニア人格検査 CPI 日本語版実施手引 誠信書房
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 安田三郎・海野道郎 1977 社会統計学 改訂2版 丸善

## 付 記

1. 本論文は昭和59年度立教大学修士論文として提出されたものの一部に加筆・修正を行ったものである。
2. 本研究の遂行にあたり御指導いただきました立教大学村瀬孝雄教授・本論文の作成にあたり御校閲頂きました東京都立大学詫摩武俊教授に深く感謝致します。

(1986年7月23日受稿)